

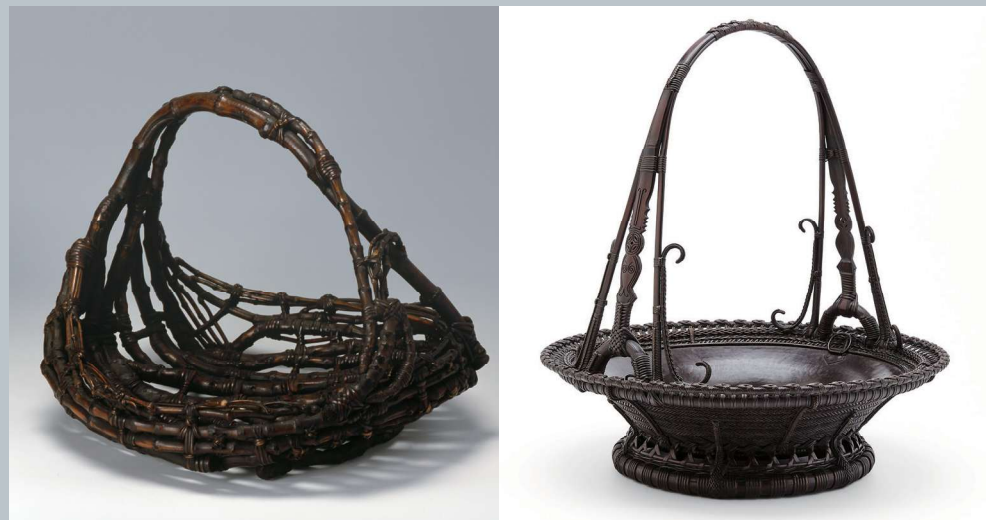
IV. 未来の竹工芸—四代田辺竹雲斎とその一門							
16	四代 田辺竹雲斎	束ね編み舟形花籃 連綴	令和2年 (2020)	59.5×27.0×22.5	竹	夢工房	第67回 日本伝統工芸展
17	四代 田辺竹雲斎／ 彦十蒔絵 若宮隆志	登龍門	平成28年 (2016)	26.5×27.5×46.0	竹、漆	夢工房	四代竹雲斎 襲名展
18	四代 田辺竹雲斎	古矢竹舟形花籃 東風	令和4年 (2022)	85.0×19.0×28.0	竹	個人	第51回 日本伝統 工芸近畿展
19	四代 田辺竹雲斎	Life Cycle	令和6年 (2024)	290.0×190.0×223.0	竹	個人	インスタレーション
20	上杉朋	襲花籃 裏山吹	令和元年 (2019)	35.5×35.5×26.5	竹、漆	あびこ山 大聖観音寺	第48回日本伝統 工芸近畿展 大阪府 教育委員会賞
21	市川陽菜	輪弧編み花籃 春曙	令和3年 (2021)	39.0×39.0×29.5	竹、漆	個人	第50回日本伝統 工芸近畿展 第50回記念 優秀賞
22	林純平	流線	令和6年 (2024)	21.0×40.0×86.0	竹	個人	

次回企画展

第27回堺市所蔵美術作品展

堺の竹工芸家たち—前田竹房斎と田辺竹雲斎—（仮称）

令和7年9月20日(土)～11月3日(月・祝)〔予定〕 会場：堺市博物館、堺市茶室「仲庵」



本展では、堺で活躍した前田家と田辺家のそれぞれ歴代の作品を展示します。作品をとおして伝統を継承し、革新を繰り返すことで生まれる個性（伝統）を紹介します。それぞれの会場において、脈々と受け継がれてきた堺の文化芸術からうまれる新たな伝統を是非ご覧ください。

左/初代 前田竹房斎《根竹手付花籃》
明治中期～昭和初期 堺市蔵
右/初代 田辺竹雲斎《大盃形花盛籃》
1927年 夢工房蔵
※出品作を変更する場合があります。



第26回 堺市所蔵美術作品展

竹工芸のかたち—伝統から革新へ—

令和7年
1月25日〔土〕～3月2日〔日〕

〔主催〕堺市 〔共催〕さかい利品の杜 〔後援〕大阪府、堺市教育委員会

〔開館時間〕 午前9時から午後6時まで（入館は午後5時30分まで）※最終日は、午後3時まで。
〔休館日〕 2月18日(火) 〔観覧料〕 大人(大学生含む) 300円、高校生 200円、中学生以下無料
※「千利休茶の湯館」「与謝野晶子記念館」の観覧券でご覧いただけます。
※障害のある方と介護者、堺市内在住の65歳以上の方は無料です。
（受付時に障害者手帳、住所・年齢のわかるものをご提示ください。）

〔展覧会のお問い合わせ先〕
堺市文化課 (072-228-7143)



堺市所蔵美術作品展は
こちらから

編集・発行：堺市 文化観光局 文化国際部 文化課
発行月：2025年1月



©Expo 2025



I. 喫茶文化と竹工芸―「用の美」

近世の堺で活躍した茶人・武野紹鷗(1502～55)と千利休(1522～91)は、茶碗や茶杓、花入(花籃)などの茶道具を改良することで、清楚で簡素な趣あるわびの美しさを表現した。江戸時代初めには、茶人の久田宗全(1647～1707)が宗全籃を制作し、和物に日本独自の審美を表した。江戸時代中頃に、禅僧の売茶翁(1675～1763)が煎茶道を確立し、当時上流階級の文化であった煎茶道をはじめとした喫茶を庶民にまで広めた。煎茶道では、竹材が茶の湯の道具以上に多く用いられ、花籃だけでなく炉屏や器局、提籃、炭斗、碗筒などがつくられた。これらの道具は、「用の美」(実用性の中にある美しさ)を表した作品として多くの文化人たちに重宝された。



二代 前田竹房斎《亀甲編炉屏》昭和～平成 堺市蔵

II. 文人趣味と竹工芸―「造形の美」

日本では、文人趣味への憧れから、煎茶道の流行とともに裕福な町人(数寄者)や書家・絵師・国学者などの知識人たちの間で竹工芸が流行した。煎茶道具の需要の高まりから、日本でも竹工芸をつくる専門の職人(籠師)が唐物籃を写したもの(唐物写)や唐物籃に似せたもの(唐物風)をつくるようになった。初代田辺竹雲斎(1877～1937)は、文人画家の柳沢淇園(柳里恭、1703～58)が描いた花籃図に影響を受け、自身が煎茶道や華道で培った雅な感覚を合わせた「柳里恭」式花籃を創作し、独自の様式をつくりあげた。それらの作品は、緻密な編組技法による装飾性の高い作品として「用の美」だけでなく「造形の美」(造形的な美しさ)をも併せた竹工芸として注目された。



初代 田辺竹雲斎《柳里恭式胴透花籃》明治～大正 個人蔵

III. 堺の竹工芸―前田竹房斎と田辺竹雲斎

明治時代には、堺に優れた竹工芸の専門職である「籠師」が多く集まり、唐物籃に似せたものだけでなく、美術品としての竹工芸もつくられた。初代前田竹房斎(1872～1949)は、竹の地下茎などの自然な曲がりを用いた作品を手掛けたことから「堺手」の名工と呼ばれ、二代竹房斎(1917～2003)は、重ね編みによる透かし技法を極め、重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された。一方、初代田辺竹雲斎(1877～1937)は、「柳里恭」式花籃をはじめ、装飾が施された古矢竹を活かした新しい作品を手掛けた。二代竹雲斎(1910～2000)は、亀甲や鱗文様などの透かし編みや繊細な抜き編み(糸目編み)を用いた作品を制作し、三代竹雲斎(1940～2014)は、まっすぐな矢竹の特性を活かし、面を意識した芸術作品を生み出した。



初代 前田竹房斎《勾玉形手付盛籃》明治中期～昭和初期 堺市蔵

IV. 未来の竹工芸―四代田辺竹雲斎とその一門

堺市で代々続く竹工芸家の四代目である田辺竹雲斎(1973～)は、国内だけでなく海外においても活躍の場を広げ、竹工芸の伝統と可能性を伝えている。四代竹雲斎の工房では、竹工芸の伝統を「守・破・離」の3つの教えに分け、次世代につなげている。「守」は伝統的な竹工芸の作品。「破」は工芸の分野を越えたコラボレーション作品。「離」は、空間によりその表現方法を変える大型インスタレーション作品。それらの作品は、現在の「用の美」に合ったかたちを表している。また、田辺家に伝わる「伝統とは挑戦なり」(技術や培われた精神を大切につなぎながらも、その時代に合った挑戦が大切である)との家訓は、伝統だけでなく四代竹雲斎の精神をも次世代の作家に伝えている。そこには、継承のなかにうまれる新しい竹工芸の「かたち」がある。

出品リスト

No.	作者	作品名	制作年	寸法(幅、奥行、高さ)	技法・材質	所蔵先	出品歴
-----	----	-----	-----	-------------	-------	-----	-----

I. 喫茶文化と竹工芸―「用の美」

1	二代 田辺竹雲斎	古竹 宗全籃	昭和	25.0×22.0×36.0	竹、漆	個人	
2	初代 田辺竹雲斎	福祿寿 器局	大正9年 (1920)	36.0×25.0×38.0	竹、漆	夢工房	
3	二代 前田竹房斎	亀甲編炉屏	昭和～平成	48.2×8.4×39.2	竹、漆	堺市	
4	二代 前田竹房斎	碗筒	昭和～平成	9.5×9.5×13.1	竹、漆	堺市	
5	二代 前田竹房斎	方円形炭斗	昭和～平成	28.0×30.2×11.2	竹、漆	堺市	
6	初代 田辺竹雲斎	煤竹網代蓋付 提籃	明治～大正	18.0×11.5×25.0	竹、漆	夢工房	

参考1		涼炉	江戸	12.5×h14.5	土師質	堺市文化財課	
参考2		伊万里染付煎茶碗	江戸	6.4×h4.7	磁器	堺市文化財課	
参考3		伊万里染付煎茶碗	江戸	5.7×h3.7	磁器	堺市文化財課	
参考4		碗	江戸	8.0×h6.0	磁器	堺市文化財課	

II. 文人趣味と竹工芸―「造形の美」

7	初代 前田竹房斎	芭蕉葉形盛籃	明治中期～ 昭和初期	79.0×30.0×4.3	竹、漆	堺市	
8	初代 田辺竹雲斎	柳里恭式胴透花籃	明治～大正	39.0×39.0×32.0	竹、漆	個人	
9	初代 田辺竹雲斎	唐物写四神花籃	大正7～昭和5年 (1918～30)	24.5×25.0×31.0	竹、漆	夢工房	
10	二代 田辺竹雲斎	海 花籃	昭和44年 (1969)	52.0×45.0×26.0	竹、漆	個人	改組第1回日展

III. 堺の竹工芸―前田竹房斎と田辺竹雲斎

11	初代 前田竹房斎	勾玉形手付盛籃	明治中期～ 昭和初期	59.5×38.0×19.7	竹、漆	堺市	
12	二代 前田竹房斎	花籃 和	昭和45年 (1970)	35.2×35.2×28.7	竹、漆	堺市	第17回 日本伝統工芸展
13	初代 田辺竹雲斎	寶山竹手壺形花籃	明治34～昭和12年 (1901～37)	18.5×19.0×49.0	竹、漆	夢工房	
14	二代 田辺竹雲斎	雲 花籃	昭和34年 (1959)	34.3×34.3×87.5	竹	夢工房	第2回日展
15	三代 田辺竹雲斎	砦	昭和46年 (1971)	36.0×31.0×55.0	竹、漆	個人	